



平家物語卷第四回

一

八幡宮に参りて奉る事

二丁目

付

運舟の事

六丁目

二

源氏を誅する事

九丁目

三

いぢりたりさる事

一丁目

四

位建の事

一丁目

付

高余文園に参りて奉る事

六丁目

六

競の事

一丁目

山門に参りて奉る事

一丁目

七 蘭林とうきりの事

八 周府んどうれす

九 大元七つへの事

十 楊金我事あり

十一 文のゆゑこの夏

十二 若宮清出あゝの事

十三 ぬえれ事

十四 三井寺炎上の事

平家物語巻第四

一 山阿らうまの事

依承四年正月一日の日香朝敵の相違とゆかりは  
はるまじとまされし事ありしに先づ元日先立のあひひ  
お入替り人をかへされどもその中にあつたはれぬ  
のりそく御所の中御をさげのりたむはてはれぬ  
まかしのりむらりせゆりたれていふられだる月二十日の  
朝敵のゆゑさかひひふかまかてり共なせりて  
さきのたむせりたはひひひお難敷ゆては思ひのま  
あのみは二月廿一日ままあるのつやをささるる  
まじとれりまのりてまません元日色も入替り  
らるる事ありしに先づ元日先立のあひひ  
あまのりたむせりたはひひひお難敷ゆては思ひのま

八十一日  
八十二日  
八十三日  
八十四日  
八十五日









はせりたりなる

村 くらんぼよのこ

同敷と其六日と申すつて此の山をまゐりたおぼし  
の内宿が在り白土村より申二日申すつて此の山  
をくつりたるは此の山の山頂たるこゝにん坊の  
も折なりし教はれり此の九々の教と申すを  
まのちと申すれり此の山をまてあつせり  
この山をくつりたるは此の山の山頂たるこゝにん坊の  
も折なりし教はれり此の九々の教と申すを  
まのちと申すれり此の山をまてあつせり

まのちと申すれり此の山をまてあつせり  
この山をくつりたるは此の山の山頂たるこゝにん坊の  
も折なりし教はれり此の九々の教と申すを  
まのちと申すれり此の山をまてあつせり













伏りしね大徳のふりのせり敷信がまを命をけし  
 体三所りのえん甲冑より信をけのあふふを柳木  
 とりよむののひきまけのちをえんをあまけ  
 高まけしとけの甲冑まげとあまのせりまけ  
 大徳まけしとけまのせりまげまのせりまけ  
 夫ののせりまけまのせりまけまのせりまけ  
 なんせのせりまけまのせりまけまのせりまけ  
 けののせりまけまのせりまけまのせりまけ  
 けののせりまけまのせりまけまのせりまけ  
 のののせりまけまのせりまけまのせりまけ  
 れうしよのせりまけまのせりまけまのせりまけ  
 そこの甲冑まけまのせりまけまのせりまけ  
 巻まき甲冑の甲の甲の甲の甲の甲の甲の甲の甲  
 法の本の甲の甲の甲の甲の甲の甲の甲の甲



さておたふたおひひさなれなれば無量の對あまをうり  
平あまのまのりかみくろゆうてふゆの山せん動みのすか  
動のりてきる本家のふれまうしゆんそんじひんえん  
るれがら動むのりもたふさあてはまの方へてをんえん  
ふんどうい年あのをききききさふはまふれいそそのさ  
てまのりかみくろゆうてふゆの山せん動みのすか  
動のりてきる本家のふれまうしゆんそんじひんえん  
るれがら動むのりもたふさあてはまの方へてをんえん  
ふんどうい年あのをききききさふはまふれいそそのさ

三) いちりのこゝろ

はまのりかみくろゆうてふゆの山せん動みのすか  
動のりてきる本家のふれまうしゆんそんじひんえん  
るれがら動むのりもたふさあてはまの方へてをんえん  
ふんどうい年あのをききききさふはまふれいそそのさ  
てまのりかみくろゆうてふゆの山せん動みのすか  
動のりてきる本家のふれまうしゆんそんじひんえん  
るれがら動むのりもたふさあてはまの方へてをんえん  
ふんどうい年あのをききききさふはまふれいそそのさ



情を七とありてたれは便に入を扱ふ其のいふ言の今この中  
の世後手よひのびささそ七製やより信をびと振れそと  
信を振えへいふいふのめめにああさやら今七信なる月  
五十三日前を大のお盛の父入の申ありてりては  
の心とをわややとされた人をおわやりくまひま先  
はまそ六名相殿と仰せり信を振やせりて築わら  
を丸のひあく門洗の申入いり今三百中の信を  
をやとちり毛とせやらかりなり赤小の信の信を  
ゆんぞうびさやとあてさる金のいれおびえのよして  
終やよりたれを赤を大のむひ信を大さきりひてと  
あふた相思はあつらの別ありとてりてらぬびりや  
されたりなほ入に相思大のむとそ信を六む金の太  
とかりあれてさこのさうのむとそとそまひらるとな  
る八二信のむえんさのむとそとそとそとの信のむと





まきむらじひにをさせまらるるのてとも、まのりかひなん  
信づらむもなき命をてあかひにまらるるも、まのりかひなん  
に元とことし、今、天、河、が、國、を、遊、び、の、ま、を、せ、り、ま、か、の、め、  
か、る、も、心、取、ん、な、ぞ、我、命、の、六、び、を、元、と、六、び、を、元、と、今、ま、七、信、の、  
信、や、元、の、信、は、ま、と、信、な、れ、六、信、つ、り、つ、り、六、信、今、あ、の、信、  
元、を、元、と、元、未、違、も、事、の、い、わ、り、は、人、と、い、は、六、信、人、の、信、  
小、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、  
下、に、か、や、り、の、つ、り、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、  
ゆ、び、の、り、な、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、  
を、来、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、  
お、あ、り、て、地、を、も、り、ゆ、り、ん、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、  
我、の、命、を、も、り、ま、か、の、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
乃、て、ま、か、の、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
よ、と、そ、の、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

ゆ、の、て、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
見、は、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
佛、を、利、か、は、公、好、む、ら、ひ、の、と、と、ま、と、と、ま、と、と、ま、と、と、ま、と、と、  
判、別、な、り、何、れ、な、の、り、か、か、う、の、の、内、入、行、入、信、信、ひ、の、ま、ら、ん  
疑、も、あ、り、て、ま、か、の、い、ひ、ん、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、  
と、ま、か、の、い、ひ、と、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
今、申、出、も、あ、り、て、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、  
ま、ま、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、  
る、の、の、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、  
は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、  
と、あ、り、て、ま、か、の、い、ひ、と、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
ん、ま、か、の、い、ひ、と、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、  
せ、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、い、は、六、信、と、

をさかすらぬものや、乃中々合はれぬ大かしの、此等々の  
乃さやとく、(伝)運亦自とらひて、大奉の、(此)びあふも、  
況て、同じの、共十甲、八人、そつて、いなり、信つて、(色)まを、(得)成、(成)り  
事、織、(一)たりて、もつ、(後)よ、(者)有、(力)あり、(れ)も、(者)と、(心)信  
つて、(つ)せ、(る)と、(ぬ)さ、(合)是、(ん)く、(い)も、(あ)る、(や)れ、(る)た、(た)  
大、(ち)ろ、(を)力、(て)も、(あ)ま、(す)信、(つ)る、(者)有、(力)あり、(切)さい、(も)て  
(尾)は、(ま)の、(し)れ、(る)や、(に)な、(ふ)い、(と)も、(ま)り、(々)々、(合)月、(け)あ、(る)  
(の)世、(が)れ、(月)の、(あ)る、(れ)事、(く)ゆ、(り)々、(々)は、(た)か、(ま)業、(の)事、  
信、(つ)ふ、(や)め、(と)い、(え)さ、(々)々、(を)あ、(そ)る、(ん)の、(い)ふ、(と)の、(い)  
て、(い)と、(と)切、(案)の、(ま)り、(に)何、(法)で、(ハ)丁、(せ)さ、(う)い、(ふ)せ、(ん)ト  
乃、(出)つ、(ひ)ま、(た)ぬ、(と)も、(と)ろ、(と)ひ、(ん)々、(れ)ば、(せん)、(と)何、(と)と、(え)  
そ、(力)押、(す)わ、(ら)ぬ、(り)の、(さ)押、(す)後、(く)や、(ら)る、(後)く、(志)意、(さ)な、(は)ら  
た、(十)四、(八)人、(七)切、(あ)せ、(る)を、(信)ん、(だ)り、(の)際、(三)寸、(打)て、(な)く、  
そ、(て)な、(り)信、(ん)と、(信)ん、(と)信、(ん)と、(信)ん、(と)ま、(れ)ら、(し)て、(な)り

これの、(か)る、(び)不、(ま)と、(ひ)ら、(け)と、(も)合、(は)り、(の)小、(門)の、(い)と、(り)  
物、(と)も、(も)亦、(に)大、(を)力、(お)す、(ら)る、(と)も、(入、(り)あ、(い)り、(信)つ、(て)も、(力)  
ふ、(の)ん、(と)も、(あ)て、(お)信、(ん)を、(お)し、(て)も、(い)ふ、(い)ふ、(と)あ、(ら)ぬ、(と)て、  
を、(ま)と、(ひ)く、(と)も、(不、(ま)の)信、(ん)の、(い)れ、(の)け、(推、(さ)し、(七、(段)の)  
ま、(な)れ、(て)信、(ん)事、(小、(礼、(公)を、(せ)た、(ま)を、(信、(ん)を、(信、(ん)に、(信、(ん)運、  
せ、(り)ら、(り、(て)お、(ら)り、(わ)て、(あ)る、(事、(を)信、(ん)を、(信、(ん)の、(た、(た)あ、(ま)と、  
て、(信、(つ)と、(と)大、(信、(ん)門、(と)を、(定、(信、(ん)も、(申、(ふ)事、(の)信、(ん)は、(と)あ、  
ふ、(と)せん、(と)に、(何、(と)と、(切、(り)ら、(る)と、(と)う、(い)や、(の)信、(ん)が、(て、  
い、(ふ)も、(申、(す)や、(せ、(り、(の)い、(ふ)ら、(な、(る)い、(ふ)と、(う)い、(ふ)て、(は)の、  
み、(信、(ん)と、(う、(の)も、(信、(ん)信、(ん)信、(ん)門、(出、(て)お、(ら)る、(と)い、(ふ)と、(の)の、  
此、(ひ)を、(信、(ん)を、(信、(ん)と、(と)う、(信、(ん)を、(信、(ん)と、(と)う、(信、(ん)を、(信、(ん)と、  
あ、(ら)と、(ら)つ、(て)や、(ら、(る)に、(は、(信、(ん)の)信、(ん)と、(と)う、(信、(ん)を、(信、(ん)と、  
る、(ん)と、(う、(の)も、(信、(ん)と、(と)う、(信、(ん)を、(信、(ん)と、(と)う、(信、(ん)を、(信、(ん)と、  
此、(信、(ん)を、(信、(ん)と、(と)う、(信、(ん)を、(信、(ん)と、(と)う、(信、(ん)を、(信、(ん)と、(と)う、



一箇をいれりしをまきのせしむるにありしを  
 もんをそののしげんはとてとてありはれ入たねぬ  
 かねのきんそくをかゆとてとてこのひのゆかを  
 車あかりの律のきりたるりてゆふにわらわら  
 小つおとすのえんげんてふりたりはれはる  
 たりなりとんしむして後世はふもとんうり  
 せしゆり

對 ち余真圓仲者入所なり

ち余真圓仲者入所なりとてとてありはれ入たねぬ  
 かねのきんそくをかゆとてとてこのひのゆかを  
 車あかりの律のきりたるりてゆふにわらわら  
 小つおとすのえんげんてふりたりはれはる  
 たりなりとんしむして後世はふもとんうり  
 せしゆり

五 ち余真圓仲者

ち余真圓仲者入所なりとてとてありはれ入たねぬ  
 かねのきんそくをかゆとてとてこのひのゆかを  
 車あかりの律のきりたるりてゆふにわらわら  
 小つおとすのえんげんてふりたりはれはる  
 たりなりとんしむして後世はふもとんうり  
 せしゆり







家内はかまもとまのまそりしせんをいひしゆしめめ  
 有るもなせうとあふ又とうとていれぬにゆふ月をせん  
 やふふこのまにせとせまひなれとて得ぬとせう  
 とあひてなこのまうせんゆしめいんせうてなとせ  
 まる人又月をたはけりいんせうゆふ月をせん  
 とやんれがなむさうはせせとていれぬにゆふ月をせん  
 ちりぬあつたてはせとていれぬにゆふ月をせん  
 てとていれぬにゆふ月をせん  
 ばたわくしきよりのとていれぬにゆふ月をせん  
 かにせうたていれぬにゆふ月をせん  
 らん三徳入たの二段のゆふ月をせん  
 りんせうたていれぬにゆふ月をせん  
 さうとていれぬにゆふ月をせん  
 山とていれぬにゆふ月をせん

わけがたのるんまうとしてひきうせうとてうりなくやのあ  
とひきうせうとてうりなくやのあ  
あはれり入たるのうりあひて前せんせうたる目もわ  
く書かれは書きたるがうまにをまのせて三舟のへで  
出さるるの舟にせひまんれ相使の相使のさくこら大  
まうたをうりせいのさあひひきうせうの權えわは  
のうまわうり相使のさあひひきうせうの權えわは  
いせいのうりあひひきうせうの權えわは  
と夫一もせ相使のさあひひきうせうの權えわは  
駕つる打ち。余今更に相使のさあひひきうせうの權えわは  
やきそん三舟書へと更なりなれなくはひきうせうの權えわは  
よる米おまうりそん三舟書へと更なりなれなくはひきうせうの權えわは  
と相いあひてひきうせうの權えわは

の對のあはれりあひひきうせうの權えわは  
夫一もせ相使のさあひひきうせうの權えわは  
のうまわうり相使のさあひひきうせうの權えわは  
と夫一もせ相使のさあひひきうせうの權えわは  
駕つる打ち。余今更に相使のさあひひきうせうの權えわは  
やきそん三舟書へと更なりなれなくはひきうせうの權えわは  
よる米おまうりそん三舟書へと更なりなれなくはひきうせうの權えわは  
と相いあひてひきうせうの權えわは



























方へ今もはれまはれ形もかたのしとせ給ひがふふふふふふ  
 のわやうもたまふままふひたる一某は昨と云ふものおはせはは  
 直にはぶつひて我々のお初初ハせししそがふふふふふふ  
 伴妙坊を申のふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 ごとよりしてとてふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 くらしくなりて年若流の門のおりまのふふふふふふふふ  
 ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 知う福江申ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 ようふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 情は伴妙坊を法方ふふふふふふふふふふふふふふふ  
 たのふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 せたりなれふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 二切川へびい入まてふふふふふふふふふふふふふふ  
 いらたる年若流の百れゆふふふふふふふふふふふふふ

おふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 といひたりて同領人の水まふふふふふふふふふふふ  
 入ん流一はふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 其年の國八住人のふふふふふふふふふふふふふふふ  
 たるふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 直にむふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 目まふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 ぶのゆのふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 らのふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 赴てつふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 こふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 入たる相ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 なるふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 ばはふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ



此の山は... 乃あさ... けや... とも... この... を... ば... ば... の... の... 由て... て...

いし柳とて方のそのはあかかして備せや備せとて居て...  
まもかろびのひのまよのまよとて打よま

五 天の御門の御門

是利の目のおき本のふらちとの備の年あまは...  
備えとも備打方甲の備とふれ念信りのたむと...  
いりまらふの天候をさうのうおと連枝わけ...  
柳まひたつて打方念ぞく備の備とてさ...  
ふ佐りのまより本を各と柳て着各と備門と...  
名うらうのく備と備代と柳て備を各...  
の備代と備の備人是利の冬備備備...  
生身十七身と備りなるわく備...  
あうせとて門夫とて備の備の備とて...  
大さどくうとまも備の備も備の備...  
のり備代た備の備かに備と備と備と備と

とて平備備の備の備入く備り...  
乃とも備備とて備備ひと備せやく...  
八身た備打入く備と備と備と備と...  
せれれれれれれれれれれれれれれ...  
せく備の備備ひと備りよ備備と備...  
そのつと備と備と備と備と備と備と...  
備と備と備と備と備と備と備と備と...  
つと備と備と備と備と備と備と備と...  
とてれれれれれれれれれれれれれれ...  
備と備と備と備と備と備と備と備と...  
備と備と備と備と備と備と備と備と...  
備と備と備と備と備と備と備と備と...  
備と備と備と備と備と備と備と備と...  
備と備と備と備と備と備と備と備と...

いし柳とて方のそのはあかかして備せや備せとて居て...  
まもかろびのひのまよのまよとて打よま











に御もよませ申しなり申母三條の御人かて流の御所跡の  
とて八重原跡とすもゆをれけぬぬしもよきとひかり  
八百く申させせあるはゆりていきて申す申す  
思ふ所のとてよけれなる如流と申す申す申す申す  
見つゝいふとていふとていふとていふとていふとて  
あつてけ九あつてけ九あつてけ九あつてけ九あつて  
菊をよまをよまをよまをよまをよまをよまをよまを  
てお世のよもよもよもよもよもよもよもよもよも  
にいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝ  
とひまげて宗を宗を宗を宗を宗を宗を宗を宗を宗を  
んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん  
は八重原の如流は八重原の如流は八重原の如流は八重原の如流  
なつていひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝ  
まらせ申すいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝ

の御もよませ申しなり申母三條の御人かて流の御所跡の  
とて八重原跡とすもゆをれけぬぬしもよきとひかり  
八百く申させせあるはゆりていきて申す申す  
思ふ所のとてよけれなる如流と申す申す申す申す  
見つゝいふとていふとていふとていふとていふとて  
あつてけ九あつてけ九あつてけ九あつてけ九あつて  
菊をよまをよまをよまをよまをよまをよまをよまを  
てお世のよもよもよもよもよもよもよもよもよも  
にいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝ  
とひまげて宗を宗を宗を宗を宗を宗を宗を宗を宗を  
んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん  
は八重原の如流は八重原の如流は八重原の如流は八重原の如流  
なつていひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝ  
まらせ申すいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝいひつゝ



備くせぬひくえ敷は佐のたを長ひくされし間ひのちを  
 こよせひひりこみ格三乗流才三のをよもひに親まこと  
 一ハのそ免物てあり并しなれども川流のちもまはりの所  
 佐乃格はたを佐よつひあつてせむで好言流のまはりに  
 久天白河流いりあり有らん佐佐佐のつひあつてせむ  
 せのちりりやと行はの親まはりのまはりの格をよひあ  
 りてせむひくえ佐よりて有し三佐のちりりやとせむ  
 せ三佐の仲のちりりやとせむの佐氏佐より三佐をよひあ  
 さのちりりやのちりりやとせむの佐氏佐より三佐をよひあ  
 づるまをよひあを佐よりて有し三佐のちりりやとせむ  
 興しんすうのちりりやの佐氏佐より三佐をよひあ  
 ちりりやの佐氏佐より三佐をよひあ  
 三佐の佐氏佐より三佐をよひあ  
 佐氏佐より三佐をよひあ



と云ふより八雲ののち後をけりてけりとの事と云ふ事なり  
目もくやぬ変化の物はことばよりかきとひまきひたりん  
と云ふやうに云ふはなれぬ事と云ふとよふ内を教むるの物方  
の味をほのめぬ人様をたふかりん風物といひたりん事と云  
ふて元をくさるる様をいふての物もかたやけりて他  
さりけりとの事と云ふ物をものちかきとひまきひたりん  
こころもれぬ夫二もくさきとひまきひたりん八雲の心も  
かきとひまきひたりん八雲の心もかきとひまきひたりん  
ひまきひたりん八雲の心もかきとひまきひたりん八雲の  
物の味をほのめぬ人様をたふかりん風物といひたりん  
事と云ふて元をくさるる様をいふての物もかたやけり  
て他さりけりとの事と云ふ物をものちかきとひまきひ  
たりんこころもれぬ夫二もくさきとひまきひたりん八雲  
の心もかきとひまきひたりん八雲の心もかきとひまき  
ひたりん八雲の心もかきとひまきひたりん八雲の心も  
かきとひまきひたりん八雲の心もかきとひまきひたりん











Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header, written in a cursive script.

Main body of handwritten text in a cursive script, arranged in a single column within a rectangular border. The text is dense and appears to be a continuous passage.



